

## 編集後記

### 編集長(ダン シロウ)

毎年のことだがマガジン September 号は、八月下旬から九月上旬の編集になる。それは東日本大震災家族応援プロジェクトの実施時期と重なる。

その結果、編集作業を東北の旅先ホテルですることになる。今年も 15 年目の福島遠征最中に、白河市、福島市、大熊町の夜のホテル自室でキーボードを叩いていた。

東日本大震災は 2010 年にマガジン創刊直後の 2011 年 3 月だから、あれからずっと続けてきたのか・・・と、しみじみ振り返ったりする年齢になった。

長期化すると何であれ、マンネリだ、専有だ、世代交代を！等と一般論を吹聴する人に会う。ところがそういう人に限って、何も長続きさせることのできない人だったりするから苦笑いしかない。

長い時間をかけて定着しているものの中に、継続の秘訣は含まれている。それを共有できる次世代の人たちは皆、知らず知らず学んでいるものだ。全く同じものが続く必要などない。その時代に必然の形で、持続展開するモノの継続力を信じている。

### 編集員(チバ アキオ)

仕事で神奈川県海老名市へ。地域で活躍する対人援助職の方々向けにお話を。そのためにも地域のことを少しでも知りたいので、はやく現地に行って海老名市立郷土資料館「海老名市温故館」へ。ここではスタッフの方が丁寧に対応してくださった。資料館は国分寺の遺構の前にあった。国分寺と国分尼寺が全国に置かれたことは知っていたけど、よく考えると尼寺もセット。僧侶同士でコンパしましたかね？とか軽口をたたくと、そんな民話もあるんです、と教えてくれた。国分尼寺のある女性僧侶が地元の漁民の若い男性と恋に落ちる。あるとき、その漁民が困っていた

そうで、理由を聞くと、国分寺ができたことで川に影響が出て、魚が捕れなくなったと。それを聞いた尼僧は国分寺に火をつける。そのため尼僧は死刑に。しかしその場所からは水が湧き、尼の泣き水とされ、供養のために碑も立てられた。同業よりも、力強い、生活力のある男に惚れる、ありそうですよね～と話す。

こうした郷土資料館には縄文式土器や弥生式土器がよく展示されている。それも結構大きな土器で、よく考えるとなかなかの技。マガジン連載仲間の見野大介さんのところで陶芸教室に先日はお邪魔。その時に土器の話に。陶芸をしてみるとよくわかる。大作は素人には難しいということ(当たり前)。土器の話をすると窯の話をしてくれた。縄文時代はろくろも便利なものもないのに、大きなものを作る、そして焼くには相当な工夫がいる。なにより大きな窯がいる。大きな土器を焼くには土の中に穴を掘って焼いていたのではないかも。でも入り口が一つだと空気が送れず、温度が上がらず、土器の強度も上がらない。窯の温度を上げるには穴が二つ、できれば煙突が必要になると。後年、登り窯というのがあっては知っているけど、そうした産地は斜面があり、粘土があり、技術があり、需要がある、そんな場所に焼き物があるよねと。技術は大陸に近く、鎖国中も開かれていた出島がある九州はやはり多くて・・・と、「焼き物の社会学」のようで楽しい。様々な条件が整ったからこそ、焼き物の名産地に。

同様にマガジン執筆をしている人たちのところにも多くの条件や資源がそろっている。これを読んでいてそろっている方々もぜひ執筆をどうぞ。

### 編集員(オオタニ タカシ)

今号から、原稿の提出先が従来の編集長宛だけであったところから、私たち編集員も送付先に加わりました。編集長と編集員 2 名の 3 か所に提出してもらいますが、メールの CC に加えて頂ければ OK です。これにより、編集作業も少し変わって、これまでは編集長が全ての原稿を受け取り、そこから私たちは編集担当の原稿だけをもって、各々担当原稿の編集作業・・・という段取りだったのですが、今回から原稿の受け取り確認も行うようになりました。これが意外と大

変で、これまでの編集長のご苦勞がうかがわれました。メール添付で届くものもあれば、クラウドの URL が貼られているもの、大容量ファイルの転送サービスのリンクが届くものなど、送信方法は執筆者によって様々で、届くタイミングも締切のひと月前から、締切日頃までと幅広く、手間はそれなりにあり、ミスが起こるリスクもあちこちに点在しています。

今回の編集作業で感じた一番の変化は、原稿を読む機会が増えたことです。これまでマガジン発刊日の前に、担当原稿については事前に目を通す機会があったのですが、今はすべての原稿が事前に手元に届きます。タイトルの確認のため、ひとまず全部のファイルを一度は開くのですが、そうすると最初の数行で引き込まれて、気づけば最後まで…ということもしばしばです。読者としてはますます捗り、編集者としてはますます時間を要するようになりました。ともかく、直に原稿を頂くとおひとりおひとりが締切を意識して、着実に原稿を送ってくださるからこそ、毎号の定期刊行ができていたのだと改めて実感します。執筆者のみなさま、いつもありがとうございます！

## 対人援助学マガジン

通巻62号

第16巻 第2号

2025年09月15日発行

<http://humanservices.jp/>

### ■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

[danufufu@osk.3web.ne.jp](mailto:danufufu@osk.3web.ne.jp)

マガジン編集部

第63号は2025年12月15日

発刊の予定です。

原稿締切**2025年11月25日!**

### 執筆希望者、常に募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいとい

う方からのエントリーを待っています。ページ制限なしの連載誌です。必要な回数、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。**執筆資格は学会員であること。**現在非会員で書いていただく事になった方には、本誌は学会ニュースレターの位置づけですので、**対人援助学会への入会**をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

### 表紙の言葉

「木陰の物語」第227話の冒頭は、こんなコマで始まる。これは有名な考え方だ。

私はこのフレーズに出会って、実践してみた結果に驚いたことがあった。それまで、こんな風な考え方はあるなあとは思っていた。

だが実際の来談者に、想像以上に刺さるところがあって、その人が実践してみたら、現実が驚異的な変化を作り出した。それを目にして、はじめて「ことば」の持つ実用的な力を実感した。

「分かっている」とはよく言うが、本当に分かっているとはどういうことかを、分かるようになった体験だった。

2025/9/15